第 195 回 Brown Bag Lunch Seminar 報告書

テーマ：日本の経済協力への一視点・・バングラデシュを事例として・・
講師：井上 正幸 氏 ／財団法人日本国際教育支援協会理事長・
前駐バングラデシュ日本国大使
日時：11 月 11 日（水） 開場 12:00 講演 12:30 – 14:00

今回の BBL セミナーでは、財団法人日本国際教育支援協会理事長・前駐バングラデシュ日本国大使の井上正幸氏をお招きし、在任中に思いを巡らしてこられたこと、「何故、何を、誰が、誰と、どの程度、どのように、いつまで」等について、また、日本国大使としての任務を終了された今、改めてこれらを振り返り他国への協力の場合も含め今後のあり方について、講演いただいた。

<u>バングラデシュ協力をするにあたっての重要な視点</u>
ものをみる見方として、鳥の目（全体像をみる）、昆虫の目（複眼的見方をする）、魚の目（流れの変化をみる）があるが、バングラデシュに関しても、この 3 つの見方で見る必要がある。また、異業種、異世代、異民族、異ジェンダーの 4 つの連携を図ることも必要。持続的な発展を促すような協力が重要で、「点」から「線」、「線」から「面」にしていくべき（被援助側のバングラデシュも、援助側の日本も）。そのため、技術移転とともに、その基盤となるインフラ整備への協力も必要。

<u>バングラデシュという国</u>
1971 年に東パキスタンとして独立。独立時の人口は 7,500 万、現在は 1 億 5,000 万で世界の第 7 位。
5 つの特徴：

1．インド : 4,200 キロメートルをインドに囲まれ、残り一部がミャンマーと国境を接している。
2．平ら：ガンジス川の下流の大デルタ。チッタゴンヒルトラックという山(海抜 300 メートル～400 メートルほど)がありそれ以外は海抜 5 メートル程度。
3．水：雨季には水が多く、田んぼの水平線ができるといわれるほど。雨季になると川の総面積がギリシャ一国になるといわれている。
4．乾き：乾季には一滴も雨が降らない。
5．人：人口が多い。

バングラデシュは年率 6%ほどの経済成長をとげており、隣国のインドは 9%。バングラデシュ識者によると、インドとの差の 3%は政治の問題であり、実際には 9%の成長の能力があるとしている。

<u>縫製業：</u>基本的には農業従事者が多いが、縫製業も盛んで、例えば、ヨーロッパで売られている大半のジーンズがバングラデシュ製。縫製業の輸出額が 1 兆 2,000 億円規模。出稼ぎ

は 500 万～600 万人程度おり、出稼ぎの収入額が 1 兆数千億。行き先は、湾岸諸国が多く、サウジ、クウェートなど。バングラデシュには 40 カ国の大使館があり、近隣諸国、ASEAN、G8 の国も含まれるが、中でも非常に多いのが湾岸諸国の大使館。南米とアフリカの大使館は一国もない。

出稼ぎ：出稼ぎにでたバングラデシュ人の、2 世や、3 世も活躍しており、イギリスには 80 万人、カナダには 30 万人のバングラデシュ人がいる。前駐「バ」イギリス大使はバングラデシュ系イギリス人。国際的なネットワークをもつバングラデシュ人は多く、バングラデシュとのビジネスを考えるときは、そのネットワークも考慮に入れる必要がある。

薬：現在もジェネリック薬の大規模な会社があるが、今後も薬は成長産業である。

陶器、皮革製品：犠牲祭などで牛を殺し、その牛革などをお土産として販売している。

小規模造船：1 万トン以下の船を造っている。労働集約型の産業であり、以前から盛ん。最近ではデンマークから、5,6 隻受注を受けた。日本への初期のバングラデシュ留学生は、造船関係の人が多かった。造船は今後も盛んにしていきたい分野。

バングラデシュの経済協力にあたっては、雇用を創出するようなビジネスの協力をしたいと思ってきた。雇用の創出がない場合、若者が多いため国が不安定になりやすい。

ジュート製品：昔は縄や袋に使用したが、現在では環境にやさしい素材として注目を集めている。JICAはジュート産業を強力な輸出産業にするための取り組みを行っている。

ソフト産業：最近インドの人件費が上昇しているが、バングラデシュではITソフト関係が成長している。人材が多く、大学も増加したこともあり、バングラデシュでもIT産業が盛んになるとみられる。1992 年まで国立大学が 13 大学であったが、私立大学ができ今は 80 大学程ある（増加分は私立大学）。私立大学は名門もある（BRAC大学など）。装置を要する学部は費用も高く難しいため、ITやビジネスマネジメント、芸術、薬、デザイン学科が多い。

宗教：

穏健なイスラムの国。アメリカ外交にとってバングラデシュ外交は、テロをバングラデシュに蔓延させないこと。インドにも 2 億人程ほどのムスリムがいるが、バングラデシュが不安定になると反射的に多くの国に影響を与えるため、不安定化させないことが重要。

バングラデシュのイメージ：

イメージとしては貧困と災害が多く、特に、洪水、サイクロンなどが多いということがあげられる。ほどほどの洪水は必要で、肥沃な土が北から流されてくるため、洪水の次年は大豊作になる。2007 年に大洪水が起こったが、次年は、米、芋が大豊作であった。気候変動の最前線にある国であり、水が数メートルあがると、3,000 万人は水没するといわれている。バングラデシュでは土地が重要であり、民事裁判では、土地の所有権問題とイスラム法に起因する相続権問題が大きい。イギリスとバングラデシュの関係に関して、イギリスにとってバングラデシュは重要であり、気候変動をテーマにし、バングラデシュを例としてイギリスで会議を開催するなどして、バングラデシュとの関係を保っている。イギリスはある国をモデルとして、国際会議を開催し、そこに首相、環境大臣も出席するなど、外交的な手腕を発揮している。

政治体制：

5 年ごとに総選挙があり、300 議席の小選挙区制。今回はアワミリーグが大勝したが、今までは BNP、アワミリーグが順番に政権をとってきた。選挙を 5 年目に実施できず、2 年間延長して選挙人登録をし、選挙を行った。バングラデシュには国民の出生登録が存在せず、１年半かけて選挙人登録を行った。これは IT の発達により可能になった。ガバナンスの問題は、IT を活用することで、人口統計や行政的に手をうつことが可能になる。行政の仕組みが、選挙人登録を通じて構築される第一歩が踏み出されたと思う。今回はアワミリーグの勝利であったが、勝利した主要な要因は現在のバングラデシュを反映したマニフェストであったこと。1. Change を訴えていた。2. 2021 年に独立して 50 年になるが、それを目指して、国をまとめていくこと訴えた。3. 前の BNP 政権は汚職が多く、国民は反発していた。4. 物価が上昇し、国民生活が苦しくなっていた。農村女性は、物価が高くなると特に厳しい状況になる。5. 20 歳以下の国民の動向として、誇りを持ちたい若者が増加する中、若い人たちの気持ちを掴んだ。国の腐敗・汚職が多いこと、ユヌス氏がノーベル平和賞を受賞したこと、PKO でインド、パキスタン、バングラは 1 万人ずつ送りこみ、これが国際的に評価されていることなど、IT の発達で情報が入り、国際的な評判がすぐわかることもあり、変化する若者の動向をとらえた。

対日関係：

大親日国。ジャムナ橋の 5 キロくらいの橋は円借款で建設。バングラデシュの紙幣の 100 タカに描かれており、また JICA と JBIC が統合したときには記念切手が販売されるなど、日本の経済援助は評価されている。トヨタの車が 8 割～9 割占めていることからも分かるように、経済交流が進んでおり、日本の技術は大きな外交ツールで、技術に対する信頼性の高さがある。人的交流の面では、JICA の専門家、OTCA の専門家、JOCV が地道に協力してきた。長い付き合いが、大きな親日関係をつくりあげている。問題は親日関係を、引き続き構築していくべきであるが、若い世代は日本が実施した援助などについて知らなくなる可能性があるが、しかるべくレベルで知っていてもらうのは重要なこと。

経済協力自問自答

経済協力：

何故するかー人道上、政治外交的観点、地域の安定性、貿易・直接投資の対象国。

何をするかーインフラ整備（橋、鉄道、灌漑、電力、肥料等）、社会開発支援（保健、教育砒素、サイクロンシェルター、気象レーダー等）、NGO 支援。

電力は 5,000 メガワット必要であるとされており、柏崎原発分の大きさ。現在の供給は 3,200 メガワットで、不足時には計画停電を行っている。電力は日本の円借款の大きな部分。社会開発支援は、ごみ処理、上下水などで評価されている。NGO 支援では、ユヌス氏もノーベル賞を受賞したが、グラミン銀行の経営が困難の時期もあり、当時の海外経済協力基金が融資をし、その後大きく成長した経緯がある。ユヌス氏はこれを高く評価し感謝している。このことからも支援のタイミングの重要性がわかる。

ガバナンス：公務員は汚職が多いが、非常に難しい分野。

経済の新しい芽の開発：
BRAC の会長アベド氏が、バングラデシュで販売されている服のデザインがあまりよくないため、日本のデザイナーにデザインしてもらいたいとしたこともあるが、協力も変化をみながら、考えるべき。同時に、資源に限りがある中で、援助が固定化するリスクもある。その他、看護学校をつくるという要請があった。インドのケララ出身の看護士は有名でヨーロッパに出稼ぎにいっていることも見ており、バングラデシュでも看護士育成が必要であるとしている。このような新しいニーズにどう対応するか、また、協力をいかにビジネスに活かすか、雇用創出はどのようにするか、連携をどう図るべきかなどが課題。また誰がするかは、政府、JICA、NGO、大学などの連携が必要だが、民間の教育訓練力が非常に大事であり、東南アジアが発展したのは、日本の大中小企業が進出し、教育訓練育訓練や、技術移転があったおかげ。資金の配分は難しく、オーナーシップを大事にする必要があるが、腐敗・汚職がある場合は注意しながら相手のニーズを吸い上げる必要があり、コンサルテーションが必要。相手の国をリードするようにして、先方の要請を聞くことが重要で、今後はこのような協力が必要になる。新しいドナーも増加しており、イスラム開発銀行、クウェートファンドなどは OECD のフレームワークに入っていないが、イスラム連帯で協力している。今後、中国を含む新しいドナーの途上国援助をどのように取り込んでいけるかは外交上の大きな課題。
地域協力：水、電力、運輸セクターに関しては、インドとの関係が不可欠で国際的に考えるべき。水協力は 2 つの国際河川が鍵。
電力：ネパール・ブータン・インドを巻き込む水力発電が成功すれば、環境にもやさしく、優良なプロジェクトとなる。
運輸セクター：鉄道建設などに際しても、国際問題であり、一カ国だけで考えても解決しないため世界銀行、アジア開発銀行などとの協力も必要。また、日本が築き上げた社会システムというソフトをどう売り込むかも重要な課題。